

口腔内処置と無麻酔での口腔内処置の危険性について

最近、無麻酔での口腔内処置を行う病院や獣医師以外の方が施術することが増えていますが、これには大きなリスクと危険が伴います。

口腔内処置は、口腔内の衛生状態の改善と歯周病や口腔内疾患の治療のために行われ、口腔内の洗浄や超音波スケーラーによる歯石の除去、ホーリング、抜歯、根尖治療、その他疾患固有の治療が行われます。

歯石は、多くの細菌と有害物質を含んでいます。これらが常時歯肉や口腔内粘膜に接し、浸潤することで歯周病や根尖疾患、口腔内疾患は進行し、悪化していきます。採食が不自由になるだけでなく、重度の痛みを伴い、難治性の口内炎や歯肉炎、顎骨を侵す歯槽骨膜炎、下顎骨骨折、口腔内と鼻腔の間の骨融解により起こる口鼻症候群、顔の骨を侵す骨髄炎などに波及します。

さらに、細菌や有害物質を飲み込み続けることは、食道及び胃腸疾患の原因となります。また、口腔内の血流は盛んであり、これらの物質は簡単に血流に含まれてしまい、全身に送られ敗血症や心内膜炎、腎盂腎炎などの全身性の合併症を引き起こします。

本来の口腔内のケアは、日常的なハミガキで行われるべきであり、これに勝るケアは存在しません。歯石除去薬やデンタルリンス、サプリメント、食事療法食などは補助的なものであり、デンタルガムなどはそのほとんどに効果がありません。1年に数回の口腔内処置を薦める獣医師や資料などがありますが、これは大きな誤りです。正しい口腔内処置を行っても、口腔内の衛生状態は数日しか保てず、徐々に悪化していくもので、効果はあくまで一時的です。口腔内処置を行う場合は、一度清浄化した口腔内衛生状態を、その後は日常のケアで維持することが前提となります。理想は、生涯一度も口腔内処置を受けないこと、あるいは一度処置をした後は行わないことなのです。

仮に1年に2回の口腔内処置を行っても、口腔内が比較的良い期間は計った2カ月くらいしかなく、大半は汚染された状態が続くこととなり、結果的には歯周病や口腔内疾患は進行し悪化していきます。また、15歳まで行ったとなると生涯30回の口腔内処置、あるいは全身麻酔ということになり、これはかなり致命的な負担になるかもしれません。また、老齢になった時に同じように行うことは元々不可能でしょう。

そもそも、なぜ犬や猫の口腔内処置に全身麻酔が必要かという、一番の理由は動物に無理をさせないためであり、負担を最小限にするためであり、安全性を高めるためであり、恐怖心を植え付けないためでもあります。無麻酔での処置は、動物の性格や口腔内疾患の重症度にもよりますが、身体を長時間保定する必要があり、口を開け続ける必要があり、痛みや不快感を感じる部位に触れ続ける必要があり、突然の動作や持続的な体動に合わせて精緻な処置を施さなければならず、決して安全とは言えません。

例えば、口腔内処置中には、唾液や歯石、血液、洗浄液、薬剤などを誤飲や誤嚥する危険性が伴いますが、全身麻酔での処置であれば防ぐことが可能ですが、無麻酔では完全に防ぐことは不可能であり、また術後にもその危険性は残ります。

さらに、特に処置前の口腔内洗浄や処置中の出血管理、処置前後の抗菌治療は徹底されなければ

ならず、これらを怠ると前記の急性の全身性感染症の原因となります。

また、口腔内処置は歯の表面を傷つけないよう、不整にしないように行うべき処置です。歯の表面の珪質は傷つきやすく、再生をしません。また、歯の表面の傷や不整は、さらなる歯垢や歯石の付着を促してしまいます。誤った口腔内処置は、一時的に歯周病や口腔内疾患が改善したとしても、その後の病状の悪化を引き起こします。

さらに、歯周（歯と歯肉の間）や歯根部の処置、必要があれば抜歯こそ口腔内処置の重要な点ですが、無麻酔ではこれらを正しく行うことができません。不適切あるいは無理な処置をした場合、出血や疼痛、過度な組織損傷、骨折などを引き起こします。

もちろん、全身麻酔には負担とリスクが伴うことは周知の事実ですし、我々も理解しています。この場合、あくまで全身麻酔の負担やリスクよりも口腔内疾患の負担やリスク、痛みや苦しさが大きいと判断されるなら、口腔内処置は全身麻酔下で実施されるべきでしょう。仮にその逆であれば、誤解を恐れずに言うと口腔内疾患を放置した方が良いと判断し、あるいはより安全な全身麻酔が可能にならないか再度検討し、そのうえで、同じ判断となるならば、全身麻酔を実施せずに出来る処置を検討するべきでしょう。

口腔内疾患に対する知識や技術を持ち合わせており、さらに動物の性格や体質、体調を考慮に入れて診療できる獣医師であれば、簡単ではなく適切な器具や補助、時間と手間が必要ですが、少しずつ口腔内をきれいにしていくことは可能です。また、薬剤やデンタルリンス、サプリメント、有効なハミガキ剤などを使って、完全ではなくても不快感や苦痛を取り除く方法もあります。

ここに挙げた要因は、知識や技術が伴う獣医師が全身麻酔下で口腔内処置を行えば、全て完璧に、より安全に行うことができます。このうちの1つでも乗り越える能力がない獣医師ならば口腔内処置は行うべきではありません。もちろん、これらの要因全てを解決できない無麻酔での口腔内処置は論外であると言えます。

そして、実はもう一点大きな問題があります。それは、全身麻酔について正しい知識がないまま、全身麻酔の負担を大きく扱い、それに比して無麻酔であることの安全性を大きく喧伝し、さらに前記の問題点を理解しないまま（理解していたら、こんなひどいことはできないと信じます）、あるいは理解しているけど説明せずに手軽で簡単に短時間に行えることを売り文句とし、無麻酔での口腔内処置を実践している獣医師が多いということです。

これらの問題は、日本小動物歯科研究会およびアメリカ獣医歯科学会からも公式にアウンスされており、ご興味のある方はこれらの団体のHPを参考になさってください。尚、この資料につきましては、これらのアウンスを参考にせずに当院での診療方針と獣医師の勉強および経験によって作成しております。

これだけ多くの事実が、無麻酔での口腔内処置を否定する理由であり、実際にこれらの問題は日常的に起こっています。以上の点を踏まえ、当院では効果と安全性を重視して口腔内処置を行っております。手軽で簡単に・・・、それで完璧なことなんてことは、なかなかできません。